

パンシヨンのお米

茨城県立日立第一高等学校附属中学校

2年

田た口ぐち

行ゆきと翔と

中学生になつてうぐヒ一部に入つてから、
 たくさんの人に何度も言われてきたことがあ
 る。それは、とにかくたくさん米を食ふよ
 ということだ。しかし私は、もともと少
 食で、お米をたくさん食ふことができな
 かつた。しかし、ある出来事をきつかけに、私
 は米をたくさん食ふことができるとな
 り、毎日のごはんが楽しみになつた。

私の家族は、毎年お正月になるとこを
 連れて群馬にスキ、旅行に行くという恒例行
 事があつた。もちろん、スキ、も好きなのだが、
 私たちがそれ以上に楽しみにしていることが
 ある。それは、宿だ。スキ、場のすぐ外には
 あるヤンションは、温泉に入ることができ、
 冷えた体を温めることができ、そして何よ
 り、そのヤンションはとにかくお米がおいし
 いのだ。普段あまりお米を食ふない私も、こ

このお米だけは特別で、5杯くらいは軽く食
べることが出来る。何年か前にオーストリアさん
にインタビューをするのがあったのだが、
お米は地元のお米と直接取引をしているそう
だ。雪の中を育つようなお米。それはおいし
いに決まっていますと納得した。

中学一年のお正月の時も、例年とおおりスキ
ーをした後、いつもの宿に泊まりに行ったり
やはり、お米は特別だ。スキーでつかれた体
に、とてもよく効く。ここに来てよかったも

思うこともかきか。私がたくさん食べている
と、そこにインションのオーストリアさんと若い
男の人が来た。オーストリアさんは見慣れている
が男の方は初めて見る。私の父親が、男の人
に話しかけた。私は驚いた。なまなら、その
男の人は私が今食べているお米を作っている
農家の人だったから。お正月の忙しい時期
に、インションの仕事を手伝いに来ていたよ
うだった。亮ニさんというらしい。亮ニさん
は私の父親とオーストリアさんと三人で話してい

た。私はその時も食事中だったの下、よく聞
 いていなかっただけ、その時に起こったこ
 とはよし覚えていり。父親が亮二さんにお米
 を買わせてくれないかとお願ひしていた。亮
 二さんおすくに答えてくれた。私は驚きつつ
 も、父親がかなり酔っていたから、さすがに
 実現しないだろうと思っただけ。どうせ明日には
 忘れていられ気まっけていられだろうと考えたの
 しがし、父親は亮二さんと本当に契約してし
 まった。このお米が家を食わられるようにな
 ると思つた。天にもその力が気持ちだった。

旅行から帰ってきて数週間かたつて、待ち
 に待ったお米が届いた。その日の夜に食った
 お米の味は今でも忘れられない。今はできない。今
 までも食ったお米の中で一番おいしく感じた。
 それ以来、私はお米をたこさん食わらよう
 になつた。何度も言われてきた。米をたこさ
 ん食わらうという課題をクリアするとかか
 きた。身長も伸びて、体重も増えた。おつと
 伸び悩んでいたのを、とても嬉しかつた。お

して、前よりも試合で活躍することができる
ようになった。タツケルが決まったときは、
本当に気持ち良かった。

そして、このお米を食むようになって食
事がとても楽しいと感じるようになった。勉
強も運動も、その後の食事をモチベーション
にして頑張れるようになった。この変化は、
自分にとって本当に大きなものになったと思
う。

これから先、このお米との出会いや、お米
を作ってくれている農二さんに感謝し、もっ
とたくさんおいしい米を食わたい。お米だけ
に限らず、毎日の食事に感謝できるような強
い人間になりたいと思っただ。